The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ゲーム読み物

ソニックの大冒険

キョーフのメカ、〈スパイダン〉現る！

「オリは、ケーキなんか食べないかんな。いらないぞ、ニッキ！」

ブ〜ンブ〜ン……。

どこから現れたのか、さっきからチャミーがうるさくニッキにつきまとっています。

ニッキの手には、いくつものケーキをのせたお皿があります。それは、町でいろいろな公務員さんを見つけて、

「はい、いつもありがとう！」

と言って、プレゼントするためのものです。

ニッキは、ちょうど、ゴミを集めている清掃局のおじさんたちに、ケーキをあげたところでした。

「ナニ言ってんだよォ。チャミーにあげるなんて言ってないじゃないか。」

「いんや！ハチ思いのニッキのことだ。きっとオリのためにケーキを作ってくれたにちがいない。」

「ちょっとちょっとォ……。」

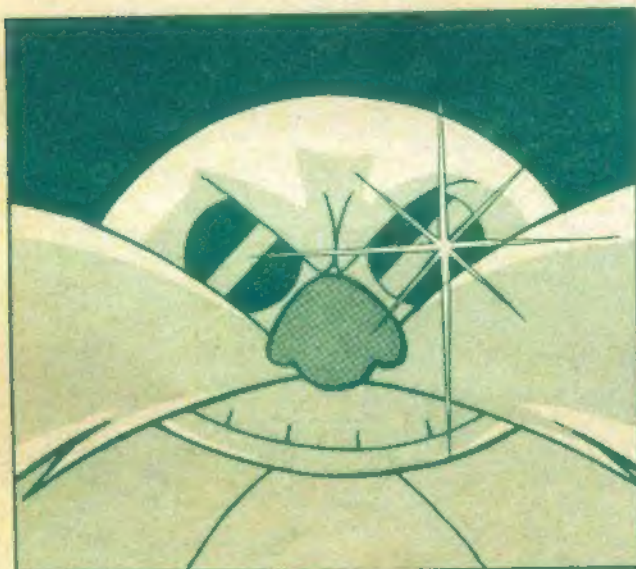
「ダミだぞ！スピードに命をかけたこのチャーミー・ビー様にとって、ケーキ、チョコレートとかいったアマ〜イものは最大の敵！あのリトル・ジョンみたいに太っちゃったら、もう最悪だかんな。ズェ〜ッタイ、食べてやらない！」

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

ヌメ～……ヌメ～～……。
これは、その〈影〉が動く時の音です。
〈影〉は、町のはずれに立ち並ぶポプラの木にいました。
ヌメ～～……、ヌメ～～……。
それは、巨大なクモでした。でも、ホンモノのクモとはちょっとちがいます。
それは、ヌメヌメと糸の上を歩くわりに、ナント！ メカのクモだったのです。
しかも、耳をすましてごらんなさい？
「ドクター……。せまっくるしいだなや。」
「シーッ！ 世界征服のためじゃ。このくらいで文句を言うんじゃないわ。」
そうですそうです。またもや、悪だくみを企てるドクター・エッグマンとオムレッツが入っていたのでした。

巨大メカグモの名前は、〈スパイダン〉。ドクター・エッグマンの数かずの発明品の中でも、スパイのようにていさつをする時には、ダンゼン威力をはっきするメカです。
「ぷっは～！ もうたまらんわだなやぁ！」
オムレッツが、息苦しさのあまり、スパイダンの背中から顔を出しました。
スパイダンのボディは、特殊なヘナヘナ金属でできています。そのため、中にいる者は、自由自在にどこからでも出入りすることができるのです。
「ったく、メカのクセにわがままなヤツじゃな。」
エッグマンもあきれて顔を出しました。するとその時です。ふたりは、思わぬチャンスを耳にしたのでした。
「ねえねえ、ニッキ。市長さんのところに行きましょうよ。」

パクタン・ケーキ計画

それは、あのエミーの声でした。エッグマンが「不幸を呼ぶタマゴ」を送りつけた時は、さすがに落ち込んでいたエミーでしたが、今ではすっかりいつもの明るさを取りもどしています。
ニッキは、やっとのことでチャミーをおっぱらったところ。
「市長さん？ そいつはいいやぁ！」
と、駆け寄ってきたエミーを大喜びで迎えました。
「ふむふむ……。市長かぁ」
キラ～ン！ ドクター・エッグマンの目が

「まったくも〜。だから、チャミーにケーキをあげるなんて言ってないってばぁ！」
「冷たいヤツだ。」
「え？」
「じゃ、このチャミー様が死んじゃってもいいのか？」
「そ、そんなぁ……。」
「クックク・・・」チャミーは、急にコロッと泣き出しました。
「そりが友だちに対して言うことか、友だちにイ。チャミーよ、スピードに命をかけるのは分かる。でも、死んだらナニもなんないじゃないか。なっ？ ケーキぐらい食べたって、速く飛べるさ。そ〜言うのが、親友ってもんだろ〜がぁ！」
「あたぁ〜！」
ニッキは、思わずズッコケそうになりました。
チャミーはなんだかんだと言って、けっきよくはただケーキが食べたいだけなのです。
「よし分かった！」
と、チャミー。
「こう見えてもチャーミー・ビー様はオトコの中のオトコだ。ニッキのオトコの友情にめんじて食べてやる。」
「ええ？」
「ケーキ食べてやる！」
そう言って、ブ〜ン！ いきおいよく飛び回ると、一気にケーキにつっこんできたのでした。
「あわわわ〜〜、や、やめろってばぁ！ このケーキは、チャミーに食べさせるわけにはいかないんだよ〜〜〜！」
ニッキは、おおあわてで逃げ出しました。

†

さて。
町のところどころでは、元気いっぱいのウイング先生を中心に、ニッキのクラスメートたちが、公務員さんさがしに夢中になっています。
でも！
ところが！
その町のかたすみで、ジト〜ッとニッキたちの様子をうかがっている、あやしい、ブキミな〈影〉があったのです。

爆発するのです。

しかも！ その人は、市長さん！

エッグマンの言うとおり、町中大騒ぎになるに決まってます。

とぉ・こぉ・ろぉ・がぁ！

エッグマンは、次のしゅんかん、意外な展開に「あんにゃぁ〜？」となったのでした。

ニッキの持っていたケーキのお皿は、あっという間に近所の悪ガキ、……そう！ ベルーカ・ブラザースに奪われていたのです。

「うわ〜、なにするんだ！」

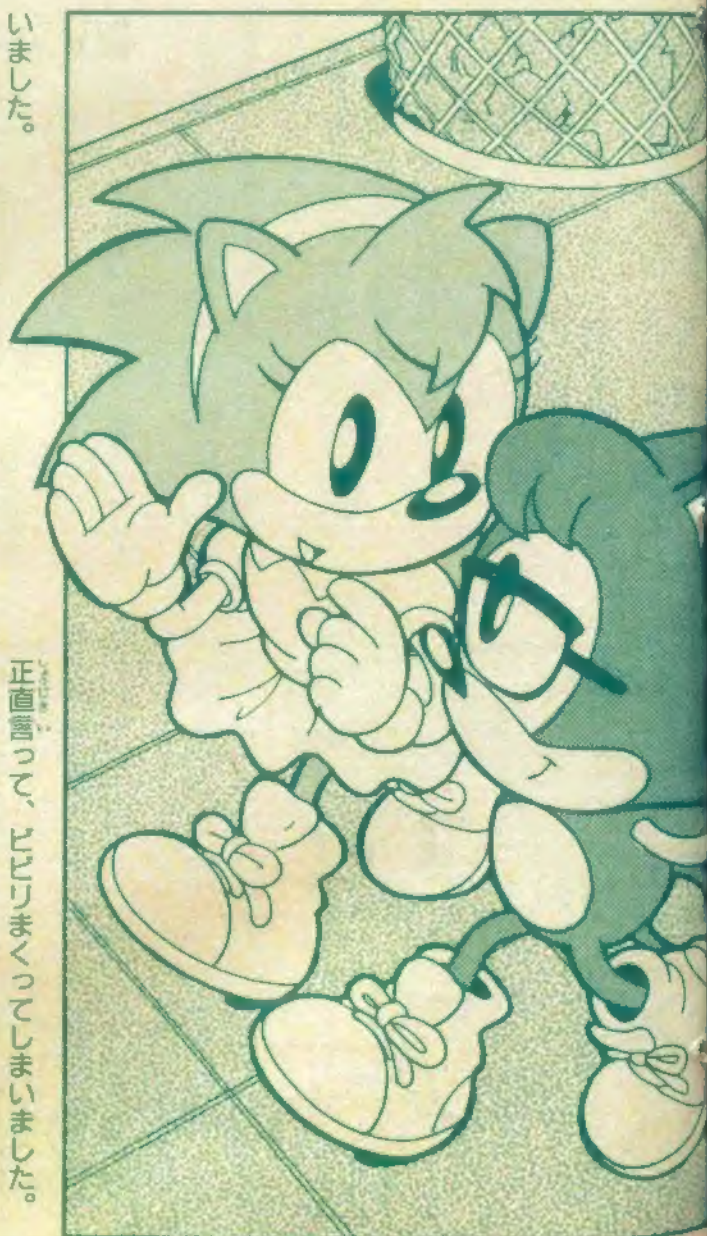
ニッキは、思わず叫びました。

「へへへぇ〜だ！ いただいたぜ〜ニッキ！」

マッド、ハッド、トッド、そしてミグ〜の四つ子は、もう得意です。

「やだぁ〜！ それ、これから市長さんにプレゼントしに行くとこなのよ。」

「チェ！ カタイこと言うなよ、エミーちゃん。そんなつまんないことやめて、オレたちとどっかに遊びに行こうぜ。」

四つ子の中でも、一番のワル、マッドが言いました。

「そうだよそうだよ。ほらぁ、ケーキだってこんなにあるしさ。ピクニックにはもってこいだぜ。」

これは、ハッド。そして、ミグ〜といっしよにエミーの手を引っ張りました。

「やだぁ〜、離してぇ〜！」

こうなったら、ニッキも黙っていられません。

「や、やめろよ。エミーの手を離せ。」

「なんだと？」

「なんだよ、ニッキ、文句あるのかよ！」

ベルーカ・ブラザースは、顔を突き合わせるようにして、ニッキをにらみつけました。

ニッキは、その迫力にもうビックリ！

正直言って、ビビりまくってしまいました。

そして、

「あ、い、いや……あの。」

エミーを離せって行ったものの、急に言葉を失ってしまったのです。

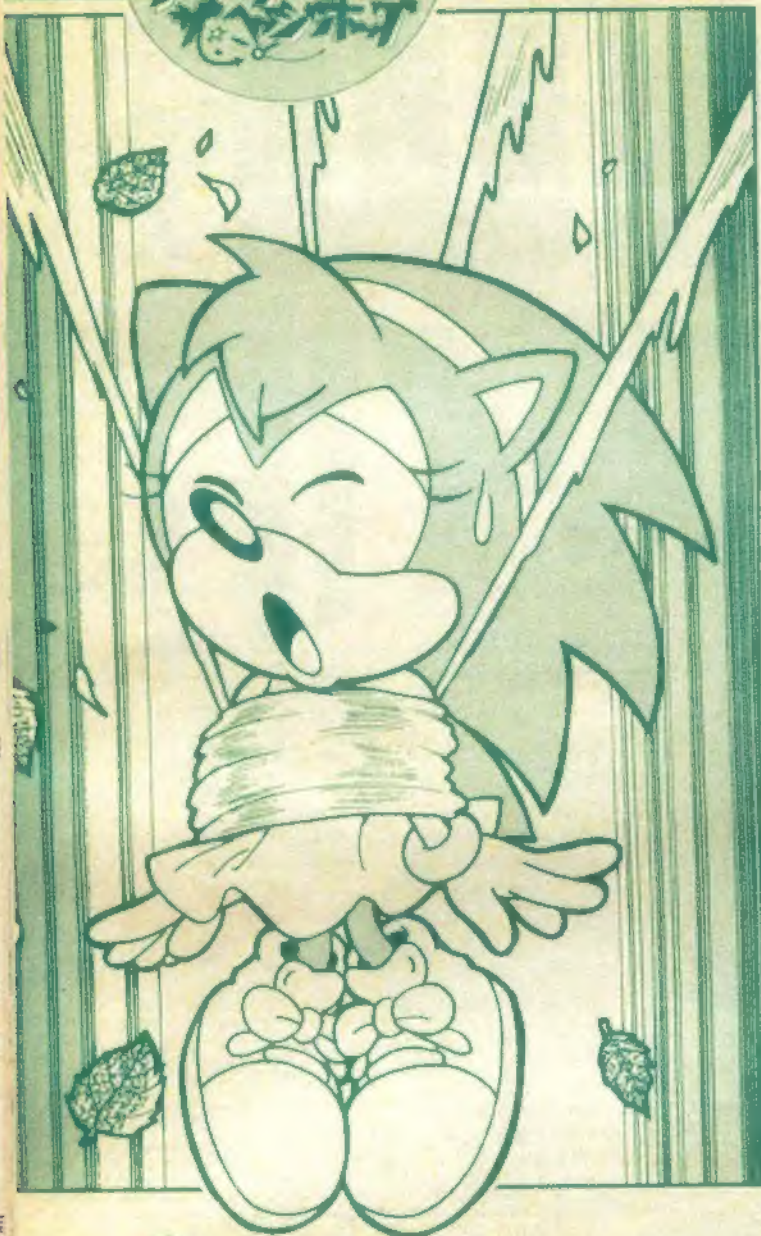
マッドたちは、前よりも何倍も悪くなっていたようです。

ニッキ……！

この時、エミーがちょっと悲しい顔でニッキを見ていました。

ニッキは、もちろんその顔に気づきました。

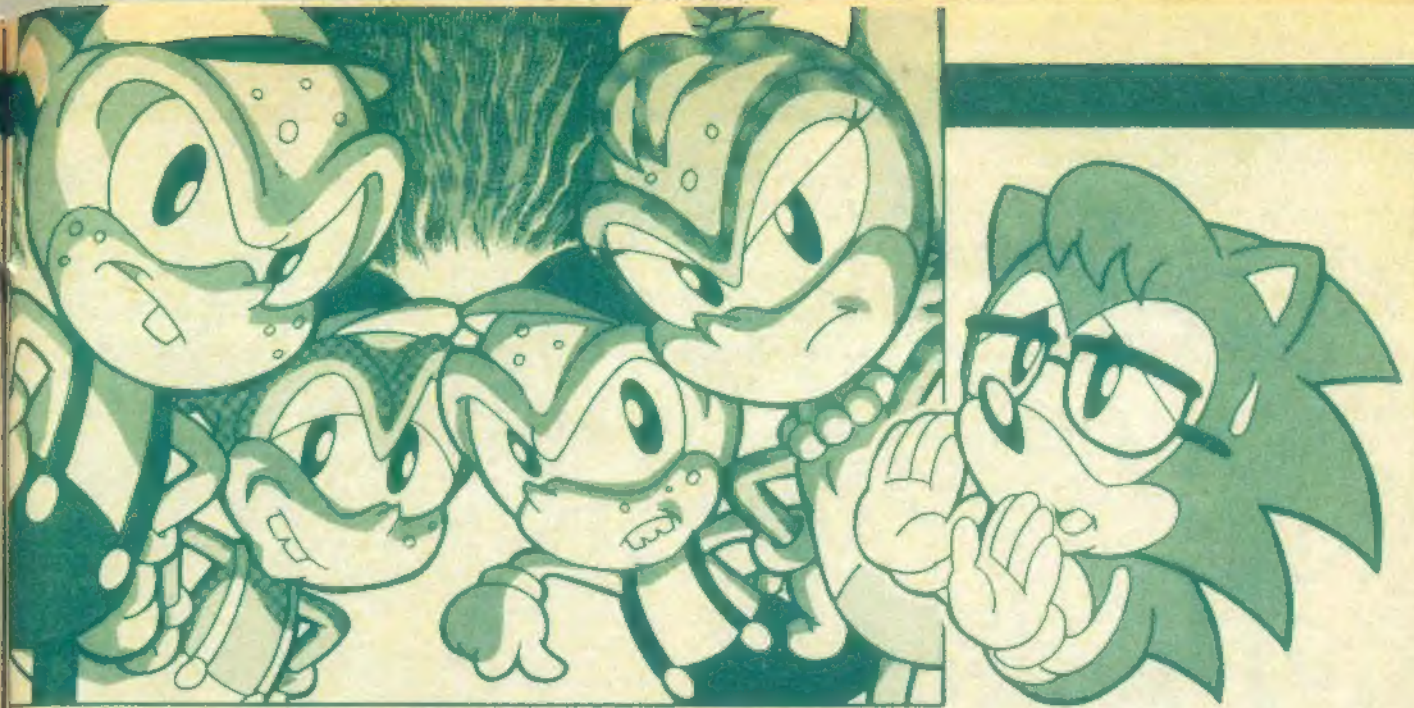
でも、体がコチンコチンになっちゃって、どうすることもできなくなっていたのです。

輝きました。
「なるほど、こいつはいい！」
「なにがだなや？」
「このバータレが！ いいか、市長といえば、公務員の代表選手だ。」
「だなや。」
「その市長を、……ボカン！ と、爆破させたとなりゃ〜だ。うっくくく・・・。」
エッグマンは、思わず笑いだし、それと同時に、ぷぷぷぷ〜〜〜〜……！ オナラをもらし始めました。
おかげで、スパイダンのおなかが、オナラでプワ〜とふくれていきます。
「あわわ〜〜、ドクター。頼むだなや。スパイダンがパンクしちまうだなや。」
コッホン！
エッグマンは、大きくセキをしてだらしないオナラと笑いをおさめると、またまたキラ〜ン！ と目を光らせました。
「とにかく。市長がやられたとなれば、町は大騒ぎになる。そうすれば、あの、カッコつけしいの、目立ちたがり屋ぁ〜のソニック・ザ・ヘッジホッグが現れないはずがない！」
その時、オムレッツが下を見下ろして言いました。
「ドクター、やってきましただなや。」
ニッキとエミーが、ポプラの木の下をペチャクチャしゃべりながら通っていきます。
「よし、今じゃ、スパイダン！」
パコン！ エッグマンが、スパイダンの頭をどつきます。
すると、ピュルルル〜〜〜〜！ スパイダンの口からは、何本もの糸が飛び出しました。
そしてそれは、あっという間に、ニッキが持ち上げているケーキにまで伸び、ちょうどてっぺんのストロベリーのところにくっついたのでした。
おしゃべりに夢中なニッキとエミーは、そのことにすこしも気づきません。
「くっくくく・・・。それ、スパイダンよ。お前の毒バクダンをふんだんに注入するのだあ〜！」
エッグマンがそう言うと、スパイダンは、ドクドクドク……！ まさに毒どくしい音をたてて、糸を通していくつものケーキに毒を注入していったのでした。
誰かが、このケーキをガブリとやったとたん、ドッカ〜ン！

「だいじょうぶ？　……エミー。」
四つ子が、ヘナヘナゲホゲホになって引き上げていくと、ニッキがエミーに近づいて言いました。
「ええ……。」
やさしいエミーは、そう答えましたが、なぜかまっすぐにニッキの顔を見ようとはしません。
ニッキには、その理由が分かっています。エミーは、ニッキがベルーカ・ブラザースにおどかされて、なにもできなかったことがちょっと悲しかったのです。
そして、それはニッキにしても同じでした。
いいえ。
同じどころか、ほんとうは一刻も早くこの場から消えてしまいたい気分だったのです。
エミーが、あいつらに連れていかれようとしていたのに。
ぼくったら。
ビビリまくっちゃって。
エミーのために、なんにもしてやれなかったじゃないか！
おくびょう者！
おくびょう者のニッキ！
「エ、……エミー。……ぼく、あの……。」
ニッキは、エミーにあやまろうと思いました。
でも、それを言いかけて、すぐにやめにしました。
だって、あやまっても仕方ないことだし。あやまったところで、自分がおくびょうだったことに変わりないのだから。
～と、その時。
「キャアア～～～！」
「エ、エミー！」
驚いたことに、いつの間にか、あたりは白いネバネバの糸でおおわれていました。
そして、エミーは、その糸にたちまちグルグル巻きにされると、大きなポプラの木の上まで、引き上げられていってしまったのです。
「エミ～～～！」
しかも、木の上には、巨大なクモがうごめいています。
ニッキは、今度こそ、全身がコチンコチンに凍っていってしまったのでした。
そのスパイダンの中で、ドクター・エッグマンが、声を押し殺すようにしてこうつぶやいていました。
「さあ、ソニック・ザ・ヘッジホッグよ、姿を現せ！　そして、正義の〈超光速エネルギー〉の威力を見せてみるがいい！」
「オオ、正義！……だなや。」

つづく

ついにソニックの出番か!?

「あんにゃぁ？　なんで、ソニックが出てこないんだなや？」
「やっぱりな。この「世界最強の科学者」ドクター・エッグマンの研究によればだ。〈超光速エネルギー〉は、正義のためにしか発動しないのだ。」
「オオ！　正義！……だなや。」
オムレッツは、なぜか正義という言葉にカンドーして叫びました。
「そうじゃ。だもんだから。あんな四つ子のバータレどもが、黒コゲになろうが、ヤツは現れんのじゃ。」
ヘナヘナ……ゲホゲホ……。
四つ子がミジメ〜な感じに倒れくずれました。
その様子に、オムレッツがぽつりとつぶやきました。
「なんだか、ベルーカ・ブラザースもカワイソウだなや……。」
†

おくびょう者のニッキ

「うぬぬぬ……、あの悪ガキどもが、ジャマしおってからにィ！」
ポプラの木の上では、エッグマンが歯をキリキリ鳴らして悔しがっています。
「さっきは、あのアッカるい先生にジャマされて、今度はしょ〜もないバ〜タレ小僧どもに！」
「まぁまぁ、ドクター。どっちにしても、あの四つ子が爆弾ケーキを食べれば大騒ぎになるだなや。」
オムレッツが言いました。
「ふん。さぁて、それはどうかな。」
「あんにゃ？」
その時、ドッカ〜ンドカ〜ンドカ〜ンドカ〜ン！
四つの爆発が起こりました。そうです、ベルーカ・ブラザースの四人が、ケーキをがぶりとやったのです。
「きゃぁ〜〜〜〜！」
エミーが、悲鳴をあげます。
「こ、これはいったいどういうことだ？」と、ニッキ。
ゲッホゲッホ〜！　あわれ四つ子は、まっ黒になってぶっ倒れてしまいました。
でも、いっこうにソニックが現れることはありません。